

「包」が進める農業規模拡大についての一考察

原田 忠直



本報告では、「包」が進める農業規模拡大について、少し考えてみたいと思います。「包」というと、先日、中国の方に、モンゴルのテントですか？と指摘されたのですが、そうではなく「包」とは「承包」、つまり「請負」という意味です。日本では、「包」という言葉を使っていますが、それは、「包」を発見した柏祐賢が「包の倫理規律」という言葉を使い、さらに、加藤弘之先生もそのまま「包」という言葉を継承しました。この流れのなかで、私も「承包」とは言わずに、この「包」という言葉を使っています。

さて、この「包」とは何か。簡単にいえば、誰かがお金を出し、一人目の請負者に仕事を依頼し、さらにその人が、二人目に渡し、そして、三人目、四人目へと数珠つなぎのような「請負」の構造を指します。人間関係がどんどん広がっていくこと、これが「包」といってもいいでしょう。

柏祐賢は、この「包」の構造が社会に根を張ることによって、「利潤の分散化」（資本蓄積の障害）が生まれると主張しています。つまり、本報告のテーマである農業だけではないのですが、「利潤の分散化」とは、一つの仕事にたくさんの人が群がるということで、そうすると利潤がどんどん分散化していくということです。そして、経済が発達するために必要な資本蓄積が行われず、それゆえ、中国経済は停滞すると、停滞論を展開しました。

もちろん、この停滞論は1949年の革命前の話です。ただし、柏の面白いのは、単純な停滞論ではなく、利潤をみんなで分け合えば、結果として、社会は安定するとも主張しています。つまり、経済は停滞するけど社会は安定する。このような一つの結論を導いたわけです。革命以前の中国の経済、社会を推測するにあたり、この結論は今でも多くの視点を与えてくれているのではないのでしょうか。ただ、柏は歴史ではなく、今なお生きています。なぜならば、現在の中国を歩いていると、柏祐賢が発見した「包」を見出すことは容易だからです。もちろん、それを一番初めに気づいたのは、私ではなく、加藤先生でした。その上、「包」を再発見しただけではなく、「包」から着想して、「曖昧な制度」という概念を導き出しました。そして、加藤先生は「曖昧な制度」から改革・開放後の中国経済の発展要因を明らかにしようと努められました。その発展要因を「包」的視点からみれば、次のようにまとめることができます。つまり、「包」とは、人間関係はどこまでも広がっていき、一つの仕事にたくさんの人が群がるわけですが、実はこの一つ一つの間人間関係が、加藤先生の言葉でいえば、「対等で水平な関係性」、言い換えれば、「対等で水平な請負関係」が築かれているということです。請負といえば、日本にもあります。もちろん、世界中に請負という制度はあります。ところが、そこには上下関係があり、ある種の命令系統が存在しています。しかし、中国の「包」には、そうした上下関係はなく、どこまでも「対等で平

等の関係性がある」という点に大きな特徴があります。加藤先生は、中国の請負関係のなかに「残余コントロール権の曖昧性または自由度」を発見し、それが中国経済を発展させた大きな要因であるとの一つの結論を導いています。正直言うと、この結論だけで中国の改革開放以降の経済発展を証明することはできないと私は思っているのですが、ただ、70年以上も前に柏が発見した「包」が、加藤によって蘇ったことは、その背後に、なにか大切なものが、隠されているのではないかと感じています。

たとえば、本日のシンポジウムのタイトルに「新しい次元に向かう日中関係」とあります。では、新しくない古い次元は何だったのかということを考えてくなります。私は近代化という言葉の中で生まれ育ってきました。近代化に対して疑問を感じることなく育ってきたといっても言い過ぎではありません。つまり、私が育ち、多くの恩恵を受けた日本社会の発展スタイルこそすべてだと思込んでいたかもしれません。そして、このような立場にあり続けていたら、「包」とは、前近代的なものだと切り捨ててしまっていたでしょう。しかし、加藤先生の再発見は、実はそうではなかったかもしれないという思いを募らせます。少なくとも私自身、現在の中国社会のなかに「包」の重要性を知れば知るほどに、自省の念に駆られるというわけです。もしかしたら、私たちは全く見当はずれな次元から中国を見続けていたのではないかと思うわけです。つまり、本日のタイトルの新しい次元という言葉を変えて考えれば、慣れ親しんだ近代化という言葉、この言葉から新しい次元を語れるのかと思わざるを得ないのです。近代化という概念から解放された地平で、何か違う言葉で中国を、新しい次元を語り始めたい、と強く思います。しかし、このようなことを話し始めると、とても時間が足りません。

かなり話が膨らみ過ぎてしまいました。本題に戻ります。

「包」という視点から上海市における規模経営の歴史を振り返ってみます。この中国の古層に潜む「包」から農業の規模経営について読み解いてみたいと思います。まず、あらかじめ結論的なことをいえば、中国で規模経営をやるとき、「包」的なシステムを活用すれば、非常にうまくいくのではないかというのが私の一つの仮説です。この仮説を少し検証してみたいと思います。

実は、もう20年以上も前のことですが、上海市の規模経営について一本の論文を書きました。今日の発表のために久しぶりに読み返したのですが、反省せずにはいられないし、恥ずかしい限りでした。反省というのは、こういうことです。みなさんもよくご存じのように上海市の近郊では、経済発展とともに、農民が工業部門に吸収されていきました。安定した収入を得ること、さらにその収入は、当然、農業収入よりも多く、その結果、農民たちは農業には興味を失い、興味がなくなれば当然その人たちの土地を集めて規模経営ができる、というような結論を書きました。実に単純な話です。まさに工業の発展、近代化によって農業も新たな次元に向かうというストーリーです。そのうえ、日本のように所有権があるわけではないので、請負権しか持たないのだから、土地の集積は簡単にできるだろうということです。もちろん、上海でも、実際、私が描いたような思惑で進んでいったことは事実であります。当時、上海市では、いくつかの規模経営の試みがありましたが、一番典型的な例として、安亭鎮の合作農場を挙げることができます。この安亭鎮というのはフォルクスワーゲンの工場があるところです。ですから、非常に多くの農民たちがどんどんそのフォルクスワーゲン関係の工場に吸収されていき、多くの土地が集積される前提

を作り出しました。そして、3000 ムー以上の合作農業、つまり規模経営が生まれました。一農家当たりが 26 ムー以上の大きな規模経営です。当時、この農場は上海の新聞にも紹介されていました。まるで農業生産の新しいスタイルだというような感じで紹介されていたのを覚えています。その記事を読み、面白そうだと思い、怖いもの知らずの大学院生でしたから、すぐに安亭鎮まで行き、無理やり調査をした思い出があります。結論から言うと、新聞では、この合作農業は大成功だったという話で、さぞや成功しているのだろうと思っていったのですが、この合作農業は、93年2月に設立されたのですが、わずか3年後の95年には解散してしまいます。結局うまくいかないのです。つまり、私が考えたストーリー通りにはいかなかったのです。それはなぜか。これを「包」の視点からその要因を考えてみたいと思います。

「包」の構造からみれば、「包」の出包者、つまり、仕事の元請けはいうまでもなくこの合作農場を建設した鎮政府ということになります。そして、第1の請負者は農業長です。次に第2の請負者とは農場員ということになります。「包」のシステムからいえば、一番の理想的な方法は、農場長にすべてを請け負わせることです。そして、農場長を軸にあとはそこから数珠繋ぎに「包」の構造が生まれていけばよいのです。そして、請負った農場員には、裁量権を最大限に与え、つまり、自由を与えれば、加藤先生が指摘するように、この自由度が合作農場の発展を約束したのでしょう。ところが、実際の運営方式をみると、農場長と農場員の関係には命令、指導などが支配していたようです。つまり、農場員に決定権を与えたわけではなく、むしろ農業労働者のような扱い方でした。なぜ、そのような関係性になってしまったかということ、そこには合作農場を建設した、実際に多額な資金を

投資した鎮政府の思惑が強く影響したためではないかと思われま。当時、鎮政府からみれば、この規模経営を建設すること、工業も農業も発達しなければならない、というような使命があったのでしょ。さらに農業税もあつた時代ですから、政府の意向が強く及んだと推測できます。言い換えれば、合作農場は、政府が「包」の「出包者」でありながら、請負った人びとに自由を与えることはなかったのです。それが今から20年ほど前の上海における規模経営の結末です。

ところが、周知のように農業税もなくなり、近年、所有権と請負権と経営権、これらが明確に分離されてきました。そうすると、政府はあまりあまり口を出さなくなっているのではないかと思います。むしろ経営権を、例えば都市のお金を持った人たちが担うようになってきています。こういう人たちが農業に対して投資する状況は、明らかに私がみた上海の合作農場とは異なる状況です。そして、それは、「包」の構造、「対等で水平な関係性」を内包した規模経営が生まれてくる素地が生まれているのではないかと推測しています。もちろん、「包」のシステムが浸透することは、同時に利潤が分散してしまう危険もあります。利益が薄いといわれる農業のなかで規模経営として成立するのか。また、米や麦を作る規模経営が次から次に生まれてきたとしたら、共倒れになってしまうのではないかと心配もしています。最近はいろいろな形でこの規模経営というものが生まれているのですが、その経営方法に、「包」的要素がどこまで反映されているのか、そして、それがどのように働くのか、今後も注視していきたいと思ひますし、その研究を通して、近代化という言葉の再検討、さらには新しい次元を語るうえで新たな視点を与えてくれるのではないかと期待しています。以上で報告を終わります。